

㊦ アナちゃんがやって来た

生駒市教育委員会学校教育課に書類を提出して、学校に戻ろうとしたときのことで。窓口を訪れた女性と対応していた職員の声が聞こえてきました。

「ちょうど良かったですね。今、ここに生駒小学校の校長先生が来られていますから。お尋ねしてください」

何かと思ってカウンターに行くと、

「私の家に、ハンガリーからやって来た女の子が滞在しています。その間、日本の小学校での生活を体験させてあげたいと思います。本人もぜひ行きたいと言うし、ご両親も希望されていますので」

ということでした。詳しくお聞きしたところ、現在、お父さんはハンガリーに、お母さんはアメリカにおられ、3年生の児童にあたる年齢のアナちゃんが自らの希望で、この方の家に滞在しているというのです。

外国人であるアナちゃんには就学の義務はありません。もっとも、在日外国人の子どもたちに就学の希望があれば、それを受け入れ、学齢簿に準ずる文書を作成し、正式に就学させることになります。しかし、アナちゃんの場合は旅行者として来日しているのですから、住民ではなく就学させなければならないというわけではありません。しかし、昨今のように国際化が進んでいるのですから、就学を希望している子どもたちはすべて受け入れてあげたいし、そのようにすることは、生駒小学校の児童にとってもプラスになる、私はそのように考えました。そして、教育委員会の人たちと相談して、事務的なくつかの課題を解決し、彼女は生駒小学校にやってくることになりました。

すでに県外で小学校生活を経験しているというアナちゃんは、ニコ

ニコと学校にやってきました。そして、3年生の教室に入りました。担任のH先生の話によると、教室でも元気にあいさつをし、すぐに溶け込んだとのことでした。

その日の午後、H先生が校長室にやってきました。用件は、「アナちゃんはピアスをしています。これを見たほかの子どもたちが『私もしてきてもいい?』と言ったときにどのようにすればいいでしょうか」ということでした。

大人には、ピアスをしている人もいましたが、子どもたちは勿論、ピアスをしている高校生なんて見かけなかった平成の初めのころのことです。しかし、アナちゃんが暮らしていたハンガリーは違います。私が、昭和61年の秋に海外教育事情視察団の1員としてこの国を訪ねたとき、多くの子どもたちが小さなかわいいピアスをしているのを見えています。

そんな経験から、「それぞれの国の固有の文化を、自分たちのものとして受け入れ、国民としてのアイデンティティをもって生きることが大切なのだ。アナちゃんが大切にしているアナちゃんの国の文化を尊重し、私たちは私たちの国の文化を大切にしなければならないのだ」と思うこと、こんなことを先生の口からクラスの子どもたちにあった方法で話してやってくださいと話しました。その後、彼女は3年生の子どもたちが理解できる言葉を選んで話してくれたのでしょう。そんな問題は出てきませんでした。

翌年、ハンガリーの首相が国賓として日本にやって来られたとき、アナちゃんのお父さんも随行の一員として来日され、生駒小学校に立ち寄られました。アナちゃんにとっては、この日が臨時の授業参観日になりました。校長室に来られたお父さんから、こんな質問がありま

した。

「アナは、学校やみんなにご迷惑をかけていませんか」

この言葉を私は懐かしい思いで聞きました。

「ご迷惑をかけていませんか」

「ご迷惑じゃありませんか」

こんな言葉、今の日本人でなく、1世代前の日本人がよく使った言葉という感じがしました。

「アナは元気にやっていますか」

「いじめられたりしていませんか」

ではなく、周囲がどうなのかを気遣う言葉が、17か国語を自由に操るというアメリカ国籍の大学教授の第一声だったのです。

「アメリカの個人主義が…」などと言えたものではありません。個人主義、それは、「自分の周りの多くの人たち、それぞれを大切にする生き方、個々を大切にする暮らし方」だったのです。

「これが、ほんとうの個人主義なのだろう」

そんなふうに思いました。

どこの国にもすばらしい文化があります。私たちの国、日本にも世界の国から認められる良さがありましたし、今もあります。けれども、そうしたものが少しずつ消えてきているような気がします。でも、

「日本はやっぱり」

そんな悲観的な見方ではなく、さりとて、

「日本が一番なんだ」

そんな思い上がりではない、ありのままその良さを見つめ、ほめられないところは改めていく、そんな気持ちを大切にしたいものです。